



# 活動報告

2006（平成18）年度

# 2006（平成18）年度 国立看護大学校研修部活動報告

研修部長 丸口 ミサエ

2006年度に研修部が行った研修は、表1のとおりである。内容は政策医療的な視点に加え、2004年11月に実施した研修ニーズ調査、および2005年度実施した短期看護研修後のアンケート調査を参考に計画した。また、2005年度から引き続き各ブロック事務所を介さず、直接、各施設から大学校に応募することとし、認定看護師教育課程においては、大学校において選考試験（筆記試験・面接）を実施した。

## 1. 看護研究法－実践コース－

施設内において看護研究を遂行できる人材を育成することを目的に、当研修部が主催した「看護研究研修基礎コース」の修了者を対象として募集した。その結果、10名の応募があり、選考の結果、ナショナルセンター3名、国立病院機構2名の計5名を受講生とした。

2006年度は、川畑助教授、遠藤講師、小西講師、上川助手、小熊助手、森助手にチューターを依頼した。受講生は、5月末から6月初旬にかけて大学校において3日間の研修を受けた後、チューターの指導のもと、各施設において、データ収集、データ分析、論文の作成を行っている。2007年2月2日には「研究発表会」を行い、各自の研究成果を発表した。

## 2. 看護研究法－基礎コース－

施設内において看護研究を遂行するために必要な基本的知識を備えた人材を育成することを目的に計画し、ナショナルセンター11名、ハンセン病療養所2名、国立病院機構30名、附属看護学校1名

表1 2006年度看護研修

研修名	応募資格	研修期間
看護研究法－実践コース－	看護師・助産師・教官で、 看護研究研修基礎コース 修了者	2006年5月31日～6月2日（3日間） 2007年2月2日：研究発表会
看護研究法－基礎コース－	看護師・助産師・教官	2006年7月24日～28日（5日間）
院内教育	看護師・助産師で院内教育 担当者	2006年8月9日～11日（3日間）
がん化学療法看護	看護師・助産師・教官	2006年8月30日～9月2日（4日間）
摂食・嚥下障害看護	看護師・助産師・教官	2006年9月12日～15日（4日間）
循環器（心不全）看護	看護師・助産師・教官	2006年11月13日～17日（5日間）
認定看護師教育課程 フォローアップ研修	「感染管理コース」 「がん性疼痛看護コース」 「がん化学療法看護コース」 修了者	2006年11月27日（1日間）
認定看護師教育課程 「感染管理コース」	看護師・助産師	2006年10月2日～ 2007年3月23日（6か月間）
認定看護師教育課程 「がん性疼痛看護コース」	看護師・助産師	2006年10月2日～ 2007年3月23日（6か月間）

の、計44名の参加を得た。

研修では、2005年度同様、西尾教授、竹内教授、中山助教授、柏木講師、小西講師、森助手を講師として5日間の研修を実施した。また、2005年度の研修実施後の調査において「文献検討の時間がもっと欲しい」といった意見が多く聞かれたため、文献検討の時間を多く設定するなどの変更を行った。その結果、2005年度より研修全体の満足度が高い結果となった。

### 3. 院内教育

2004年11月に実施した研修ニーズ調査において、院内教育担当者に対する研修ニーズが高く認められたため、2006年度初めて、亀岡教授、中山助教授の協力を得て、自施設の院内教育プログラムを評価・改善するために必要な基本的知識と方法を学ぶことを目的に、研修を計画した。募集の結果、全国から74名の応募を得たが、抽選の結果、ナショナルセンター5名、ハンセン病療養所2名、国立病院機構21名の、計28名の参加を得た。

研修では、院内教育に関する基礎的な講義の後、グループワークにおいて、院内教育プログラムを評価・改善していくための課題を明確にしていく過程を学習した。受講生からは、「院内教育についての基礎知識からプログラムの立案、評価までの一連の流れが理解できた」「現状の問題点、改善方法を明確にすることができた」などといった意見が聞かれ、研修に対する高い評価を得た。研修ニーズを考慮し、2007年度も実施する予定である。

### 4. がん化学療法看護

2004年度に開講した認定看護師教育課程「がん化学療法看護コース」は2005年度に引き続き休講したが、各施設から開講を望む声が高く、2006年度は飯野教授の協力を得て、短期看護研修として、がん化学療法薬の安全・確実な取り扱いおよび投与管理についての基本的な知識と、がん化学療法を受ける患者のQOLを向上させるための看護を学ぶことを目的に研修を計画した。募集の結果、全国から75名の応募を得たが、抽選の結果、ナショナルセンター6名、国立病院機構33名、附属看護学校1名の、計40名の参加を得た。

研修では、飯野教授をはじめ、国立国際医療センター薬剤部の斉藤真一郎先生、国立がんセンター中央病院がん看護専門看護師の森文子先生をお迎えし、講義・演習・グループワークを織り交ぜた3日間の研修を実施した。受講生からは、「あたりまえのように行っていることの根拠を知ること、正確に行うことの大切さを学んだ」「有害事象の発生機序や根拠に基づいたケアを理解することができた」などといった評価を得る一方、「研修期間が短く、時間をかけてじっくり学びたい」という意見も聞かれた。このため、2007年度は研修期間を4日間に延長し、さらに充実した内容で実施する予定である。

### 5. 摂食・嚥下障害看護

嚥下のメカニズムを理解し、摂食・嚥下障害のある患者に対する適切なりハビリテーション看護の能力を備えた人材を育成することを目的に、研修を計画した。募集の結果、全国から72名の応募があり、抽選の結果、ナショナルセンター6名、ハンセン病療養所3名、国立病院機構31名の、計40名の参加を得た。

研修では、2005年度に引き続き、講師として、「ナーシングホーム気の里」施設長の田中靖代先生、昭和大学歯学部口腔衛生学教室の弘中祥司先生、名古屋医療センター附属看護助産学校教育主事の浅野妙子先生をお迎えすると同時に、2005年度の当研修の受講生が、研修後1年間の成果をもとに演習時の講師として指導にあたった。研修期間は2005年度より1日延長して4日間の研修とし、プログラムの順序も2005年度の反省から組み替えて実施した。その結果、受講生からは、「摂食・嚥下に関する解剖、基礎から応用、演習と段階を追って教えていただき、とてもわかりやすかった」との評価を得た。なお、発達障害児（者）に対する研修は、例年、国立病院機構千葉東病院で実施していることから、2007年度は、研修目的を中途障害者および高齢者の摂食・嚥下障害に限定して実施する予定である。

## 6. 循環器（心不全）看護

循環器看護，特に心不全とその看護に関する基本的な知識と方法を学ぶことを目的に，石井教授，飯野教授，遠藤講師の協力を得て，2006年度初めて計画して募集を行い，ナショナルセンター5名，国立病院機構19名，附属看護学校1名の計25名の参加を得た。

研修では，国立病院機構埼玉病院臨床研究部長の鈴木雅裕先生を講師としてお迎えし，心不全の概念，原因と病態，合併症，診断と治療に関する講義の後，循環器系のフィジカルアセスメント，心不全患者に対する看護介入などについて，講義・演習・グループワークをとおして学んだ。受講生からは，「基礎的な疾患理解から最先端の心臓移植まで幅広く学ぶことができた」「自分の行ってきた看護が看護だったのか，自分の看護とは何なのかという視点から日々の看護を振り返る機会になった」などの意見が聞かれ，研修をとおし新たな視点で看護にあたる意欲を与えることができた。

## 7. 認定看護師教育課程 フォローアップ研修

認定看護師としての活動の方向性を見出すことを目的に，現在，ナショナルセンター，国立病院機構に勤務している修了生149名を対象に募集し，141名の参加を得た。

2006年度は「感染管理コース」「がん性疼痛看護コース」「がん化学療法看護コース」の3コースの合同開催とした。前半は，厚生労働省医政局国立病院課看護専門官の菊池幸子先生を講師としてお迎えし，「これからの日本の看護界におけるスペシャリスト（認定看護師）の役割」と題した講演会を開催し，政策や診療報酬における評価，保健・医療・福祉の現場に必要とされる認定看護師，標準化された水準の認定制度の重要性といった視点からお話いただいた。後半は，各コースから2名，計6名のパネリストが「院内におけるスペシャリストの役割－多職種との協働を通じて」と題した発表を行い，その後，全体でのディスカッションを実施した。修了生からは，各施設における具体的な活動をとおして苦慮している点などが報告されると同時に，今後の活動に向けた建設的なディスカッションを行うことができた。

当研修は，各認定領域における学会，研修会，講演会などの充実が図れてきたため，2006年度をもって終了することとするが，今後も修了生の活動をバックアップしていく体制を継続しフォローしていきたい。

## 8. 「感染管理コース」（認定看護師教育課程）

院内感染サーベイランスの実践と感染防止技術の根拠の検討に必要な知識と技術をもって，組織横断的に感染管理を行える認定看護師を育成することを目的とした，講義・演習・実習を合わせ630時間の教育課程である。2006年度をもっていったん当コースを閉講することを周知し募集を行った結果，ナショナルセンター，国立病院機構から計45名の応募があり，選考試験の結果，第6期生として20名を迎えた。

研修生は，疫学・統計学，微生物学，感染症学といった，看護師としては慣れ親しむ機会が少なかった分野の講義に苦闘しながらも，院内感染対策チームのリーダー，あるいはリンクナースとしての資質を養うべく，日々，努力を重ねている。

## 9. 「がん性疼痛看護コース」（認定看護師教育課程）

がん性疼痛を有する患者の疼痛マネジメントおよび全人的なケアが実践できる能力と，他の看護師の指導・相談を行うことができる能力をもった認定看護師を育成することを目的とした，講義・演習・実習を合わせ630時間の教育課程である。ナショナルセンター，国立病院機構から計17名の応募があり，選考試験の結果，第4期生として16名を迎えた。

研修生は，がん性疼痛に苦しむ患者に良いケアを提供するために，専門的かつ高度ながん性疼痛緩和に関する知識・技術の習得に励んでいる。